

面接授業レポート
古代オリエント世界と旧約聖書
担当講師:月本昭男
クラスコード:K

142-004814-1 松山 和弘

2016 年 5 月 25 日

1 ヨベルの年

1.1 ヨベルの年の規定

あなたは安息の年を七回、すなわち七年を七度数えなさい。七を七倍した年は四十九年である。その年の第七の月の十日の贖罪日に、雄羊の角笛を鳴り響かせる。あなたたちは国中に角笛を吹き鳴らして、この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それが、ヨベルの年である。あなたたちはおのおのその先祖伝来の所有地に帰り、家族のもとに帰る。

(新共同訳 レビ 25:8-10)

神は、50 年ごとに訪れるヨベルの年に、全ての債務を解消し、奴隷を解放することを命じました。

史実として、実施されたかどうかは不明です。実際には実行されていなかったかもしれません。

「ヨベルの年の規定」は、50 年間債務奴隷であれば、債務の償いが完了して奴隷から解放されると解釈することができます。このことが、ユダヤ教、キリスト教を信じる者にとっての希望であり、奴隷の状態からの解放を得ることや、償いの完了の根拠となりました。

仮に、私が無神論者であり、自己責任論者であったとします。そして債務奴隷の状態であったなら、債務返済に心を奪われてしまい、希望を持つことができなくなっていたかもしれません。

私は神の民と信じることにより、解放の希望を持てることは、幸せなことであると思います。

1.2 バビロニア虜囚とヨベルの年

バビロニア王ネブカドザネル 2 世は、BC597 年、ユダ王国を属国としました。続いて、エルサレムを攻めヨヤキン王をバビロンへ連行しました (第 1 回バビロニア虜囚)。

BC587 年、ネブカドザネルはエルサレムを包囲。BC586 年、エルサレムは陥落し、神殿は破壊されました。そして、多くの捕虜がバビロンへ連行されました (第 2 回バビロニア虜囚)。

神殿が破壊されたため、イスラエルの民は、祖国へ帰ることは困難と考えていたようです。創世記の「バベルの塔」はバビロニアの塔であり、「ノアの箱船」と類似の話は、「ギルガメッシュ叙事詩」にあります。これ

は、バビロニア虜囚が影響しているかもしれません。

BC539 年、ペルシャ王キュロスは、バビロニア王国を倒しバビロンへ入場しました。そして、バビロニアに虜囚となっていた諸民族を解放しました。

エルサレム神殿の破壊から、キュロスによる解放令と故国帰還まで 50 年を要しました。

バビロニア虜囚は、民が犯した罪の結果による債務であり、キュロスによる解放は、神の意志により、50 年間の虜囚による債務の償いの完了として、神学的に受容されました。

この出来事について、フランシスコ会訳聖書では、以下のように注釈しています。

恐らく、「ヨベルの年の規定」はこの出来事を前提にして制定されたものであろう。

...

つまり、キュロスによる解放と故国帰還を、神によるものとしてとらえ、そこから平等な社会建設を目指して、このような規定が制定されたと考えられる。

1.3 Liberty Bell とヨベルの年

Liberty Bell は、米国の自由と独立、奴隷解放を象徴する歴史的な資産です。この鐘は、米国の独立戦争や独立宣言の特に鳴らされたとされます。

Liberty Bell には、欽定訳聖書の「ヨベルの年の規定」が刻印されています。欽定訳聖書の該当箇所を以下に示します。

And ye shall hallow the fiftieth year, and *proclaim liberty throughout all the land unto all the inhabitants thereof*: it shall be a jubile unto you; and ye shall return every man unto his possession, and ye shall return every man unto his family.

(欽定訳聖書 レビ 25:10, 斜体部分は Liberty Bell の刻印)

この刻印により、米国の自由の理念が、聖書の「ヨベルの年の規定」に依ることを、象徴的に確認することができます。

私はこれまで、米国の自由とは、近代化の過程で出てきた、資本主義 (自由な経済活動) のみであると思っていました。これは誤りで、「ヨベルの年の規定」による、神が命じる解放があることを、今回の講義ではじめて知りました。Liberty Bell は、「自由の鐘」と訳されるが、「解放の鐘」と訳すべきだと私は考えます。

1.4 「生きて虜囚の辱を受けず」への批判

聖書では、イスラエルの民は、元々はエジプトの奴隷であったとされています。そして、奴隷から解放された民とされています。

このことが根底にあるので、兄弟、奴隷を過酷に扱ってはいけないことになっています。

私は、困窮した場合には一時的に奴隷になることは、やもうえないことだと、聖書は示していると思っています。「虜囚の身となったとしても、将来は解放される」と信じていることができることは、重要なことであると考えます。

日本には、虜囚は恥であり、恥となるのであれば、死によって責任をとるという考えかたがあります。例えば戦時中に、以下のように通達されました。

恥を知る者は強し。常に郷党家門の面目を思ひ、いよいよ奮励してその期待に答ふべし、生きて虜囚の辱を受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿れ
(戦陣訓, 1941 年 東条英機)

私は、「権威ある者」から、善意があるなら死すべきだと示唆されれば、今でも多くの人は従ってしまうと思っています。このような悲劇を繰り返さないためにも、私は聖書の教えを伝えていく必要があると考えます。

2 苦難の僕の詩

2.1 苦難の僕の詩とイザヤ書

見よ、わたしの僕は栄える。
はるかに高く上げられ、あがめられる。
かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように彼の姿は損なわれ、人とは見えず
もはや人の子の面影はない。
それほどに、彼は多くの民を驚かせる。
彼を見て、王たちも口を閉ざす。
だれも物語らなかったことを見
一度も聞かされなかったことを悟ったからだ。
わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。
主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか。
乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のようにこの人は主の前に育った。
見るべき面影はなく
輝かしい風格も、好ましい容姿もない。
彼は軽蔑され、人々に見捨てられ
多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し
わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。
彼が担ったのはわたしたちの病
彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに
わたしたちは思っていた
神の手にかかり、打たれたから
彼は苦しんでいるのだ、と。
彼が刺し貫かれたのは
わたしたちの背きのためであり
彼が打ち碎かれたのは
わたしたちの咎のためであった。
彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。
わたしたちは羊の群れ
道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。

そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。
苦役を課せられて、かがみ込み
彼は口を開かなかった。
屠り場に引かれる小羊のように
毛を刈る者の前に物を言わない羊のように
彼は口を開かなかった。
捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。
彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか
わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり
命ある者の地から断たれたことを。
彼は不法を働かず
その口に偽りもなかったのに
その墓は神に逆らう者と共にされ
富める者と共に葬られた。
病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ
彼は自らを償いの献げ物とした。
彼は、子孫が末永く続くのを見る。
主の望まれることは彼の手によって成し遂げられる。
彼は自らの苦しみの実りを見
それを知って満足する。
わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った。
それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし彼は戦利品としておびたしい人を受ける。
彼が自らをなげうち、死んで
罪人のひとりに数えられたからだ。
多くの人の過ちを担い
背いた者のために執り成しをしたのは
この人であった。
(新共同訳 イザヤ 52:13-15,53:1-12)

「苦難の僕の詩」は、イザヤ書にある「主の僕の詩」の1つです。

イザヤ書は、旧約聖書の中の預言書の1つであり、イザヤ書は、書かれた時期の違いにより、3つの部分に分かれています。

第2イザヤ書には、4つの「主の僕の詩」があり、4番目が、「苦難の僕の詩」です。

イザヤ書の全体の構成を以下に示します。

1-39 章 第1イザヤ書 BC8世紀

40-55 章 第2イザヤ書 バビロニア陥落直前 (BC509)

42:1-4 第1詩

49:1-6 第2詩

50:4-9 第3詩

52:13-53:12 第4詩 (苦難の僕の詩)

56-66 章 第3 イザヤ書 虜囚からの帰還直後

「主の僕の詩」の僕が誰であるかは諸説あり、通説は存在しません。

2.2 苦難の僕の詩について

第2 イザヤ書は、バビロニア虜囚が終わるバビロニア陥落の直前 (BC509) に書かれたとされます。

バビロニア虜囚は、民が犯した罪の結果による債務であり、キュロスによる解放は、神の意志により、50 年間の虜囚による債務の償いの完了として、神学的に受容されました。

ところが、バビロニアの虜囚によって苦難を受けたが、虜囚解放を迎えることなく生涯を終えた人々があり、これらの人々の罪は赦免されてないのではないかと言う神学的矛盾が現れることとなりました。

これが、「苦難の僕の詩」の背景にあるとされます。

そして、「主の僕」を、「将来現れるメシア」とする信仰が生まれます。

2.3 苦難の僕とキリスト

キリスト教信仰では、「主の僕の詩」の僕は、「将来現れるメシア」であり、イエスによって実現したとされています。

キリスト教徒にとって、「苦難の僕」は、キリストの受難と切り離して読むことはできません。

神の一人子イエスキリストが、イザヤの預言のとおり現れ、全ての人の罪を贖うために、犠牲となったと信じるからです。「贖罪の死」は、神の一人子イエスキリストによって、行われ、今後、いかなる生贄をささげても、神は受け取らないとされているのです。

2.4 苦難の意味をめぐる因果応報論とそれへの批判

日本では、過去および前世の行為の善悪に応じて現在の幸・不幸の果報があり、現在の行為に応じて未来の果報が生じるとされる、因果応報論が信じられています。無意識的に信じられていると言っても良いかもしれません。

信仰を積み御利益があるとか、頑張れば必ず評価してもらえるは、因果応報論由来であろうと思います。例えば、教育現場では、次のように指導されます。

未来に対する肯定的感情

5つの絶対的信頼感を培う

1. 生きていれば、必ず良いことがある
2. よいことをすれば、必ずよいことがある
3. 続けていれば、必ずできるようになる
4. 一生懸命にやれば、必ずそれに見合う成果がある
5. 具体的目標をもって一生懸命にとり組めば、必ず実現する
(押谷由夫, 「道徳性形成・徳育論」, 放送大学教育振興会, 2011)

私はこのような、因果応報論的なこと、御利益的なことには賛同しません。

キリスト教では、キリストに従うことにより、弾圧を受けたり、殺されるとかもしれないとされています。

私は、キリストを信じる者のあり方は、「苦難の僕」にあると考えます。これは、真福八端 (マタイ 5:3-12) みることができると思います。最後に、真福八端をふりかえり、このレポートを終えたいと思います。

心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。

喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。

(新共同訳 マタイ 5:3-12)

参考文献

[1] 月本昭男, 旧約聖書に見るユーモアとアイロニー, 教文館, 2014 年